

問題があるように思われ、患児の指導とともに親への指導の必要性が感じられる。

<看護側からみた患者集団の変化について>

50年9月1グループの場合、長期入院の患者から、よそ者であるかのような特別視の傾向があった。ひとりの新入院患者を車椅子で取り囲み、威圧感を加えるなどしておびえさせるようなことがしばしばうかがわれた。職員は、長期入院患者に、仲間意識をもって受け入れができるような働きかけや配慮もしてきたが、何回かの経験と、スポーツやクラブ活動を通して相互の接触が深まり、4グループ目の現在、殆んど特別視はみられない。かえって小さい子を見守っているような態度に変わってきている。1年かかって、相互関係がやっとうまくゆき始めた感じである。

<今後の課題として>

入院を患者にとって最も必要から適切な時期に行ない、こういった試みをきっかけに医療機関を有効に多くの人が利用できるようにしてゆきたい。また退院後の継続看護が大切と思う。その他最大の課題は、症状が進行して入院が必要になったときの受け入れ体制を確立することにあると思う。

32) 自 助 具 の 工 夫

国立療養所刀根山病院

玉 置 公 子	中 村 三 枝 子
谷 昭 子	栗 林 真 理 子
大久保 一 枝	兼 子 文 代

<はじめに>

筋ジス患者にとって自助具の持つ意義は、ADLの拡大だけでなく、患者の自立心を助長し、また精神的満足を与えるという面でも重要なものである。

そこで今回は、①車椅子上での坐位保持のためのサイド枕、②尿器の改善、③ラジオ体操棒の考案について、具体的に工夫したので報告する。

<サイド枕について>

サイド枕として考案したものは3種類あり、

- ① 布貼で中に雑誌を入れたもの。
- ② レザー貼りでスポンジを入れたもの。
- ③ レザー貼りでフェルトを入れたものである。

試作品①は、車椅子上での坐位を安定させるため、患者と車椅子の隙間をなくすようなものとして考案したもので、高さはアームレストまでとした。しかしこれは、腰部は固定されても、股関節部から大腿部の動きが窮屈で、また布の汚染が目立つなどの欠点があった。

試作品②は、患者に当たる側はスポンジ、車椅子サイドに当たる側はベニヤ板を入れてまわりを

レザーでくるんだ。これは病状の進行に伴う脊柱の変化に対し、その支持をするためには高さが不十分であった。

試作品③では、高さを腋窩のやや下方までとし、そこからアームレスの部分までは、車椅子を操作しやすいように考慮して斜に削った形をとり、材質は変形しないように固目のフェルトとベニヤ板を入れた。これは試作品①②より坐位保持に秀れ、また肘を乗せる部分が高くなるので、上肢運動がかなり自由になる。

<尿器の改善について>

車椅子上、またはベッド上で便器を挿入した体位で排尿する際、全面的に介助を要する 경우가多く、患者の精神的苦痛は大きい。そこで尿器の口に特殊な補助具を取りつけることを工夫した。その材質にはプラスチックを用い、円筒状で上面に陰茎を固定するための開閉式ふたを取りつけ、口の方はふちを作り尿の逆流がストップされる仕組みにした。これは取りはずし、水洗可能である。これを患者に使用した結果、ふちが陰茎に当り少し痛い、また尿器の位置を安定させるためには、全体的にカーブのある補助具にした方が良いなどの意見があり、さらに改善の必要がある。

<ラジオ操作棒>

ラジオやカセットの押しボタンは相当な筋力を必要とするため、弱い筋力でもスイッチが押せる操作棒を考案した。それは木製の棒を用い、ハンドルの手前にアンテナを立て、ハンドルが手前に逃げないようにしてから、ハンドルの下に棒をくぐらせ、ハンドルと棒によって、テコの原理を応用し、弱い筋力でスイッチが押せるようになっている。

また録音など、同時に2つのスイッチを押すためのものとして、図のようにした。



更に操作を円滑にするため、材質を軽いプラスチックや、その他折れない材質で工夫してみたい。

<おわりに>

今回は、自助具3点の工夫について報告したが、今後さらに広く自助具が利用されるよう考案していきたい。

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

<はじめに>

筋ジス患者にとって自助具の持つ意義は、ADL の拡大だけでなく、患者の自立心を助長し、また精神的満足を与えるという面でも重要なものである。

そこで今回は、(1)車椅子上で坐位保持のためのサイド枕、(2)尿器の改善、(3)ラジオ体操作棒の考案について、具体的に工夫したので報告する。